

初冬の夜。

場末の大橋の下。

その橋裏を屋根がわりにして、川原の水の流れぬ場所に建てたホツタテ小屋の中で、老バタヤコウセイが火にかけた鍋をかきまわしている。橋のたもとからつきだした街灯が、この橋の下を丸く照らし出している。

川上で犬がほえる。

フィと顔をあげたコウセイが、そばのバケツをさげてノソノソと下手の川原へ。

上手の街道から出て来たリクが街燈の下に立つ。厚化粧によれよれの錦紗の着物に、男の革のバンドをしめてふところ手をしている。もう四十近いが、またどこやら水々しい女。チューインガムをかみながら川原を眺めていたが、ゆっくり石段の上に腰をかける。

下手からコウセイが水の入ったバケツをさげて戻って来る。

リク 水汲みなの、コウセイさん？

コウ ……

リク いねえかと思ったよう。

コウ ……

リク なんとか言えよ、やい！

コウ ……（口の中でなにかブツブツ言っている）

リク バタヤのコウセイ！ なぜ返事しねえんだ？

コウ ……

リク ツンボになったのかよう？

コウ ヘッ。

リク 人にばっか口をきかせて返事をしないのはコウセイでねえぞ。

コウ ……（リクを見ていた顔がニタツと笑う）

リク ハッハッハ、そうだろう？ 年中言うじゃないのよ、公正でねえよ！

コウ さぶいなあ。（相手に聞かせようという気の全くない言い方）

リク こうしてさ、スズゲンのおリクねえさんが、おめえとかけ合漫才をやりやって来たんじやねえの。黙ってるのは仁義にはずれるよ。

コウ 商売はもうすんだのか？

リク　へへ、こんな早くから商売をすましていちやあスズゲンたちゆきませんよ。店の方だけがカンバンで、ホントの稼ぎはこれからボチボチ始まるうというところさ。

コウ　なんでもいいから、もう少し両足をよせて腰かけろ。

リウ　どうしてよ？　（ひろげてかけた自分のヒザの間を見下す）

コウ　ここからだとまる見えだ。

リク　見える？　ハツハハ　（すっかり嬉しがってスラリと立ち上る）　そうこなくっちゃ！　や

れドツコイシヨ。　（言いながら、その狭い石段をチラホラと降りて来る）

コウ　……（ゆっくりホツタテ小屋の火のそばへ）

リク　ホントにもう寒いねえ。

コウ　だからよう。

リク　なにさて

コウ　ズロースはねえのか？

リク　だって、めんどくせえ。

コウ　風邪ひくべえ。

リケ　なあになれっこだ。

コウ　いやさ、ムスメがさ。

リク　フフフ、なにさ。スースーしていっそういい気持だ。　（言いながらこれも火のそばへ。チ

ユインガムを出してコウセイに渡す）

コウ　……（別に礼も言わないでその皮をむいて口の中へ入れながら）　だけんどお前という女も

悪い癖だ。

リク なにが？

コウ 夜が更けて来ると、三日にあげずこんな橋の下なんぞへやって来る。

リク 酒の酔をさましにさ。ほてってしょうがないもん、からだじゅう。

コウ ……（鍋の中をかきまわす）

リク それに、この火にあたりたくなるんだ。

コウ こんな乞食小屋のか？

リク そいから、おじさんが恋しくなるんだ。

コウ 俺はバタヤの、ヨナゲヤのヂヂイだ。

リク 違うよ。漫才の中にもフクレ漫才というやつがいるのよ。コウセイさんがそれだ。そのフ

クレ漫才を相手にあたいは漫才をぶちたいからよ。

コウ 違うなあ。

リク 違う？ なにが違う？

コウ そういう事を言うんだ。

リク なにがさ？

コウ お前という女は、そういう女だ。

リク どんな女？

コウ 気が重くなると口が軽くなる。

リク アラ、うまい事言うねえ！

コウ ペラペラペラペラと、そうやってデタラメをしやべまくるよ。元来はお前という女は、そつたら女じゃあねえ。

リク アラマア！

コウ なげえつきあいだ、それ位わからなくって。

リケ アラマア？ ちよいと！

コウ 俺の日はふし穴じゃあねえ。

リク アラ、アラ！

コウ 人間、無理しちゃあいけねえ。

リク そいじゃあ、あたいは元来どんな女？

コウ リクちゃんは元来そんな女じゃねえ。

リク だから元来どんな女よ？

コウ ペラペラペラペラと、口が軽くなってる時は、気が沈んでるんだ。

リク 気が浮きたって面白くってしょうがないから、口が軽くなるのよ。

コウ 嘘つきな。なげえなじみだ、俺に嘘ついたって無駄なこつた。

リク ゲゲツ、見破られたかあ！（大ゲサな身振りをして見せて、続いて両手で踊るかっこうをしながらでたらめのフシで歌う）こんな女に誰がしたあ！

その時暗い橋の上を人の通る足音がして向う側のランカンから奥の川原へむかって上からドサリと何か投げ捨てた音。

コウ …… (その方へ耳を澄ます)

奥で二つ三つ子猫のなき声。

コウ 又捨てやがった。

リク なあに？

コウ 子猫を捨てて行くんだ。

リク どれどれ…… (立って行きそうにする)

コウ よしなリクちゃんが見ると又拾って来る。

リク だって可表そうじゃないか。

コウ 可哀そうだって仕方がねえ。飼ってやるわけにもいかんしなあ。

リク 猫は食えないの？ 犬だったら食べるんだらう？

コウ 猫はすっぱくてダメだ。

川上で犬が二匹ケンカしている声。

リク ……うっちゃつとけば、あの犬に食い殺されるねえ。

コウ 仕方がねえ。そういう生れあわせだ。

リク だけど、おじさん、それが公正ですか？

コウ この世の中に猫もいりやあ、犬もいりやあ狼だっている。その後アサちゃんどうした？

リク だからさ、間もなく狼どもに食われっちゃうわよ。

コウ 言わねえこっちやあねえ。

リク もう片足くらい食いちぎられてるかな。

コウ おめえの手でどうにかならねえか？

リウ 当人が食われたがっているんだもの、私なんぞ何を言ったってなんにもなりやしなない。

コウ そうかのう。……（シヤモジで鍋の中をかきまわして、かけ茶碗わんによそう） おめえも食

うか？

リク うまそうな匂いだねえ。でも、いつかみたいに犬の肉が入っていたりすると気味が悪いか

らなあ。

コウ 今日のはブリのアラがへえつとる。うまいぞ（大きな魚の骨をつかみ出して、横ぐわえに

しゃぶる）

リク そいじゃあ一杯もらうかな。

コウ （茶碗わんをとり出してオジヤをよそう） それ。

この時下手奥の離れた所から男の声が呼びかける。

男の声 オーイ、そこであんまり火をもしちやあ困るがなあ！（その声でコウセイもリクの方を

ふり返るが別に返事はしない）……オーイ君！ あぶないからそこで火をたかんようにしてくれよう！ オーイ！

リク ありやあパトロールだろう？ 黙ってていいの？

コウ なあに、うっちゃつとけばいいよ。どうせここまでは来やしないんだ。丁度この川が管轄の境目になっていてな。こっち側でも、川向うでもめんどくさがってなんともしやしねえ。

リク あの声は川向うの若い方のおまわりだよ。

コウ 若い方だろうと年のいった方だろうと、ちかごろのおまわりなんぞ、気の荒いやつから斬られやしないかとビクビクもんで歩いているんだ。（なおもこちらへ向ってどなっている男の声へ）承知しましたよう！ 気をつけますからよう！（その声で川向うの男の声はしなくなる）

へへへ、強盗でも現れりやあ、いちもくさんに逃げ出すやつだ。（魚の骨をしゃぶる）

リク ホントに妙な世の中になった。（オジヤをすすする）

その時気がつくと上手の橋のたもとの街灯の下に若い男が現れて、ちよつとこちらを見ていてからゆつくり石段を降りて来る。千波助夫。シャツにズボンに白い汚れた上衣を着て、運動靴をはきおとなしそうなボンヤリした顔。……とまどったようにあたりを見まわしながらホツタテ小屋の火に近づいて来て、ボンヤリと中の二人を見ている。

コウ うん？（魚の骨を横ぐわえしたまま若者を見あげている）なんだよ？

リク ……（これも茶碗に唇をつけたまま）どうしたの？

千波 うん？（あと何か言うかと、コウとリクが待っているが何も言わない）

コウ なんだ君は？

千波 いや、僕あ……（又言葉がとぎれる。それが言うべき事があつて言わないのではなくて、言葉というものを忘れてしまったかげんである）

リク どうしたの、あんた？

コウ（あきれてリクをふり返って）リクちゃんの知りあいか？

リク ううん、知らないよ、こんな人。あんた、どうしたのさ？

千波 こんばんわ。（妙な時にとぼけたような挨拶）

コウ いや、この人の顔には、どっか見覚えがあるかな。まあこつちへ入りなよ。（火のそばをあける）

千波 ええ……（ノツソリと火のそばへ来て尻を下す）

（未完）

底本.. 「三好十郎の仕事 別巻」 學藝書林

1968 (昭和43) 年11月28日第1刷發行

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23) 年5月25日